

私は社会福祉事務所の就労支援員として仕事をしている。支援している対象の方の多くはそれぞれにドラマチックな人生を生きしており、支援の中で、その方の人生が変わる瞬間、まさに転機に立ち会うことが度々ある。前回その一つを紹介した。今回新たな

ナビゲーター

事例を紹介することにした。前回同様、守秘義務の関係上これまでのいくつもの経験をフィクションとして再構成して記述する。

ある日、社会福祉事務所に市民病院のソーシャルワーカーから電話連絡が入った。この電話を機にCさんの生活保護が開始された。

産業カウンセラーの現場から

相談者の思いに
共感して伴走する

17

生死の境を越えて介護職に

Cさんは38歳の女性。小学校高学年以来、継父からの性的虐待を受けていた。高校中退後、家を出て一人で生活を始めた。いわゆるフリーターで収入を得ながら生活。ギリギリの生活で貯蓄もなかった。数年前から体調が悪化し、貧血や腹痛、不正出血が頻発するようになったが、無保険なので病院には行かなかった。路上で気を失い倒れ、救急搬送されて市民病院に入院した。検査の結果、子宮癌（がん）であることがわかった。第4ステージ。Cさんは死を覚悟した。手術で主な癌細胞は切除できたが、転移した一部は残され

立ち会った転機

た。退院ひと月後から私が就労支援に入った。支援はCさんの気持ちや状況を聴くところから始まった。抗癌剤の副作用のつらさ軽減のためのイメーシ法や呼吸法も助言しつつの支援であった。Cさんの癌細胞は半年後に奇跡的に消滅した。九死に一生を得たことがCさんの転機となった。Cさんは言った。「癌になるずっと前から私なんか死んでもいいんだと思っていました。その私の命がたくさんの方のお蔭で救われたのです。この命を人のために役立てることでお返ししたい」。ハロー

ワークの「求職者支援制度」を活用し、Cさんは「介護初任者研修」の資格が取得できる3カ月の職業訓練を全うした。訓練終了後、Cさんは特別養護老人ホームに就労し自立した。その後さらに上級の「介護福祉士」の資格も取得し、今では職場のリーダーとして活躍している。

人生という物語の主人公はもちろん本人である。私達就労支援員はお手伝いをするに過ぎない。それが、ご本人が転機を活かす役に立ったなら就労支援員としては嬉しい限りである。

【日本産業カウンセラー協会中部支部講師、社会福祉事務所就労支援員、産業カウンセラー・公認心理師・2級キャリアコンサルタント 渡辺英明】

(火曜日に掲載)

